

バクマン。 勝利学（2）

門脇 正法

集英社インターナショナル ウェブ立ち読み

仲間に「ライバル」とルビをふる

『疑探偵TRAP』の連載が始まり、第一四話目で新妻エイジの『CROW』とアンケートで同票の三位に並んだサイコーとシュージン。エイジを抜くことが前任の担当編集の服部への恩返しとなり、アニメ化やコミックスの売上げ一〇〇万部が夢ではなくなってきたところで、落とし穴が待ちかまえていた。

なんと、マンガと高校生活を両立させていたサイコーが、疲労のために入院してしまったのだ。それも、肝臓を手術しなければならぬ状態にもかかわらず、サイコーは「週刊連載は／休んじや駄目なんだ!!」と息巻く。

ジャンプで一緒に連載をしているエイジ、平丸一也、福田真太が次々と見舞いに訪れる中、病院にあらわれる佐々木編集長と現在の担当編集の港浦吾郎。このとき、「亜城木夢叶は／仲間ですから」と言う福田に、「仲間か……／ぬるいな」と佐々木編集長。これに対し、福田は「もちろん／仲間」と書いて／ルビは「仲間」です」と切り返す。

福田の言うとおり、本当の仲間は「仲間」であると同時に「ライバル」でもあるの

第三章 常に「本気」でぶつかろう



ライバルであり、仲間——サイコーやシュージンたちのまわりには、熱いマンガ家たちが集まってくるのは、サイコーたち自身が熱いからだ。
コミックス4巻65ページ

だ。その意味で、福田には悪いが、サイコーとシュージンにとって、最大の仲間は新妻エイジということになるだろう。

ちょっと話が前後してしまうのだが、二人が初めてエイジを意識したのは、一五歳のエイジが『Large bander』で準入選を果たした手塚賞の選考結果発表が載っている少年ジャンプを読んでからになる。

「皆がゲームをして遊んでいる時に我慢してきた甲斐がありました」というエイジの受賞の言葉にムカつくサイコー。さらに、青森から出てきたエイジが高校に行きながら連載を準備しているという話を編集の服部から聞いたことが、二人の『この世は金と知恵』の創作意欲を駆り立て、エイジの『CROW』との赤マルジャンプでの直接対決を実現させる。サイコーとシュージンは一週間後のアンケート速報では一位となるものの、本ちゃんでは三位でエイジに敗北を喫することになる。

この時点でサイコーとシュージンの二人が直接エイジに会ったことはなかった。しかし、エイジの『Large bander』を読んだことで、サイコーとシュージンのモチベーションが上がったことは明らかであり、エイジを意識したからこそ、二人がこんな短期間の内に赤マルに読切を掲載できたのも事実なのである。

まさに、新妻エイジ様々という感じだが、サイコーとシュージンはエイジに直接会うことで、これまで以上のライバル心を自らの中に植え付けていく。

それは、新連載が決まっていた『YELLOW HIT』ではなく『CROW』の一話目を描いてしまったエイジが、佐々木編集長から編集部へ呼び出されたときだった。そこでネームを描くエイジを見た二人は、生まれながらの天才の実力に圧倒されてしまう。

とはいえ、サイコーとシュージンはエイジからの一方的な攻勢を受けて、守りに入っていたわけではなかった。「僕達が／連載するまで／絶対連載続けて／待っていてください」と言うサイコーのまなざしに「ものすごく活躍するマンガの主人公と同じ目」の輝きを見出したエイジは、サイコーとシュージンの二人が自分のライバルとなることを予感する。

それがあつたからこそ、のちにサイコーがアシスタントで入ったエイジの仕事場で、エイジはサイコーをはじめとするアシスタントたちの「本気」のアドバイスを受け入れて、ジャンプ読者を楽しませるために、完成していた五話目の原稿を描き直しするという決断をする。

逆に、サイコーはそんなエイジを観察しながら、新妻エイジが新キャラを生み出すのに小学校時代からずっと描いているマンガを使っていることを知り、これが自分にも当てはまることに気付くのだ。

これはサイコーとエイジがお互いをライバルと認め合っているからこそその相乗効果と言えよう。

だからこそ、エイジはサイコーがアシスタントを辞めることを快く承諾し、サイコーとシュージンはエイジの期待に^{こた}えるようにジャンプ本誌で連載されるレベルの作品を描き上げようと努力することになる。

その結果は、サイコーとシュージンの『疑探偵TRAP』での連載決定ということになり、これに対してエイジは「約束通り／連載続けて／待ってました」「競争しながら／頑張れるの嬉しいです／負けないです／ズギューンです」と、自分の気持ちを表現。そこには、「ライバル」とルビをふるエイジがいたのだ。これにより、本物のライバルとしてサイコーとシュージンとエイジは、少年ジャンプ本誌の大舞台で、「本気」で戦うことができるようになったのである。



サイコーとシュージンにとって最大のライバルは新妻エイジ。だが、それと同時に、エイジは亜城木夢叶作品の最高の読者でもあるのだ。だからこそ、サイコーたちは一作一作に命を込めて描く!
コミックス4巻183ページ

なぜ陸上男子リレーは銅メダルを獲得できたのか？

最近のスポーツの世界で、こうしたサイコーとシュージン、あるいはエイジや福田たちの「仲間＝ライバル」関係を実際に体現している競技といえば、陸上男子の四×一〇〇mリレーになるというのが私の意見だ。

北京五輪でのレースをTVで見た人は多いだろうが、日本チームは第一走・塚原直貴選手、第二走・末續慎吾選手、第三走・高平慎士選手、アンカー・朝原宣治選手あさはらのりあつの四人で、日本陸上男子トラック種目五輪史上初となる三位、銅メダルの榮譽に浴することになる。

そのレースを、メインスタジアムで第一走の役目を終えた塚原選手が、翌年の二〇〇九年の『ジャンスタ』で次のように語ってくれた。

——第一走ということ、塚原選手は何をポイントにして走ったんですか？

塚原「ボク個人の種目の100mで、足に違和感が出ていて、レースの予選は全然よくなかったんです。大丈夫かなと思いつつも、前日の夜は、『自分じゃなくちゃ

ダメなんだ！』と強く思いながら、一生懸命ケアして。すると当日のアップの際、そこで『これならいける！』と感じたんです。そうしたら全力でバーンといけたんですよ」

——塚原選手で加速したって感じはありますか？

塚原「やっぱり第1走というのは火付け役ですからね。1番目立ちますし、1番重要なのかと思いますよね。勝負の起点となりますから」

——自分がイメージしていた何%で走れましたか？

塚原「その時点では100%でいけたと思います」

——それが第2走の末續選手、第3走の高平選手、アンカーの朝原選手につながって、銅メダルという結果になるんですね？

塚原「スクリーンを見ていて、朝原さんに渡ったのが2番手だったんですよ。横からも来ていたんで、このままいったらヤバいかなと思いつつも、祈るような気持ちで見えています。ゴールに入った瞬間に3番だってわかったので、本当に最後で形になって、歴史に残ってよかったと思いますね！」

北京五輪銅メダルのレースの後、朝原選手は引退し、末續選手は長期休養に入る。塚原選手と高平選手だけが、北京でのレースを知っているリレーメンバーなのだが、次の年のベルリンの世界陸上で、日本チームは表彰台には届かなかったものの四位となり、日本の短距離陣の層の厚さを見せつけることになる。

現在、日本チームのメンバーには、その塚原選手と高平選手に若手の江里口匡史選手、藤光謙司選手が加わっている。二〇一〇年の日本選手権の一〇〇mでは江里口選手が二連覇、二〇〇mでは藤光選手が日本選手権を初制覇したことで、塚原選手を江里口選手が、高平選手を藤光選手が突き上げていきながら、日本男子四×一〇〇mリレー全体をレベルアップしていくいい流れができあがってきているのだ。

あたかもそれは、少年ジャンプという舞台で連載を狙い、アンケートで上位を狙って切磋琢磨しているサイコーとシュージン、エイジ、平丸、福田などの連載マンガ家陣との関係と同じと言えるだろう。

「本気」で戦っているからこそ、仲間に「ライバル」というルビがふれるのだ。

君に「本気」の覚悟はあるか？

『バクマン。』はバトルマンガではない。しかし、そこでは常に「本気」の戦いが行われている。特に、サイコーとシュージンは、マンガに関してはプロと呼ばれる編集者や編集長と「本気」のぶつかり合いを繰り返している。

サイコーとシュージンが初代担当編集の服部と最初に「本気」でぶつかったのは、赤マルに掲載された『この世は金と知恵』で、二人が本ちゃんのアンケートでエイジに敗北し、イチからやり直そうと誓った後の打ち合わせだった。

すでに、服部からは二人が描く王道マンガは普通で、エイジどころか他の新人にも負けてしまうとダメ出しをされていたサイコーとシュージンだったが、服部の意向に背いて、王道マンガのネームを提出する。

激高する服部に、サイコーとシュージンは王道でやりたいという思いを打ち明ける。二人の思いの根底には、一八歳までに自分たちの連載マンガをアニメ化したいという「本気」があった。

その直後、編集部にやってきた新妻エイジが『CROW』のネームをまたたく間に



サイコーとシュージンが誰よりも信頼する担当編集者は服部哲。
だが、その服部と正面衝突しても自分たちの思いを貫こうとする二人。
コミックス3巻45ページ

仕上げるようすを見せることで、服部はサイコーとシュージンに王道への挑戦が無謀であることを気付かせようとしたが、ついには「半年間」という期限付きでサイコーとシュージンの王道マンガのネームを見る、と折れることになる。だが、ここで忘れてはいけないのは、「本気」でぶつかるには覚悟が必要だということなのだ。

たしかに、サイコーとシュージンは、半年間の執行猶予を得ることになる。しかし、同時にそれができなければ、それ以降は服部の言うとおりのネームを描くか、もしくはそれでもまだ王道マンガが描きたいなら、そのときは服部は二人の担当を外れるという条件を飲んでいなのだ。このときの、サイコーとシュージンには、自分たちの才能を見出してくれた服部とも決別するほどの「本気」の覚悟があったのだ。

同様の覚悟は、『疑探偵TRAP』の後、サイコーとシュージンにとって二回目のジャンプ本誌連載マンガになった『走れ！大発タント』の連載中に起こった。

TVのトークショーに出演した新妻エイジが、「最大の敵は？」と司会者に聞かれたとき、エイジは「ライバルは／亜城木夢叶先生／です」と即答する。これを仕事場で見ていたサイコーは、居ても立ってもいられずに実家にダッシュ、自分の部屋から亜豆に電話し「俺／「タント」／やめたい」と胸の内を明かす。それがエイジと競う



「ライバルは／亜城木夢叶先生／です」というエイジの発言は、サイコー&シュージンに対する、「このままで満足していいのか?」という彼なりの叱咤激励の言葉であった。

コミックス9巻126ページ

ために、エイジに喜ばれるために、そして自分たちのマンガがアニメになって、亜豆に声優をしてもらうための近道だと思つて。

もちろん、編集部で二人のこの発言は大波紋を引き起こすことになる。直接、佐々木編集長に「タント」の連載をやめたいと思つています」と告げるサイコーに、佐々木編集長はキツパリと「やめたければ／やめろ」と。「連載を途中で／投げ出すような／作家はいらん」「ジャンプ」には描かない／その覚悟があるなら／やめてよし」と。

佐々木編集長の口から出た「覚悟」という一言に、一瞬たじろぐサイコーとシュージンだったが、すかさず「新妻エイジに勝つてみせます！／だから「タント」は／終わらせてください！」とシュージン。年内の新連載会議の回数を確認して、「やめさせて／もらえれば／その3回で必ず／新妻エイジと／競える作品を／真城と／作つてみせます」「それが／できなければ／契約は／切つてください」「ジャンプ」には／描きません」「わがままを／言つてるんですから／そのくらいのリスクは／背負います」と、とどめの一撃を加える。

要するに、「本気」でぶつかるということには覚悟が伴っているということなのだ。ただ、自分がやりたいことをペラペラと言つていても、それだけではまわりを納得さ

せることはできない。それが自分より先を行っている先輩や上司であるならなおさらだ。そういう先輩や上司に自分のワガママを主張したいのであれば、自分はその主張と同じぐらいのリスクまで背負っているという覚悟まで見せなければ、まわりは「本気」とは見てくれないのである。

年末までの三回の会議の最後の最後で、二人は『完全犯罪クラブ』（のちに『PCP』に改題）で三回目の連載を勝ち取ることができたが、その始まりには二人の「本気」の「覚悟」があつたことを忘れてはいけない。

マンガ家VS.マンガ原作者

サイコーはマンガ家であり、シュージンはマンガ原作者だ。一見、同じマンガを描くということではぶつかり合うイメージはないかもしれないが、一番近くにいる存在だからこそ、「本気」でぶつかり合っているのはこの二人ということになるかもしれない。

スポーツの世界でも、サイコーとシュージンと同じく、一番近くにいる存在だから



「本気」であれば何でも許されるわけではない。
何かを得たかったら、何かを失う覚悟も必要。
シュージンの発言はその覚悟の表われだった。
コミックス9巻177ページ

こそ、一緒に世界と戦って、結果を残してきた選手がいる。それが陸上の男子ハンマー投げの室伏親子なのだ。

第二章で、二〇〇〇年のシドニー五輪前に松坂大輔選手のリトルシニア時代のマンガをジャンプ本誌に読切掲載した話をした。

この『世界再戦―松坂大輔リトルシニア物語―』に続くシドニー五輪応援特集企画の第二弾として、私が原作を担当したのが『好敵手―室伏広治物語―』だった。

室伏選手の父親、重信しげのぶは一九七二年のミュンヘン、一九七六年のモントリオール、一九八〇年のモスクワ（日本は不参加）、一九八四年のロサンゼルスと、ハンマー投げで四回、五輪日本代表となり、七五m九六という日本記録を保持したまま引退した、「アジアの鉄人」と呼ばれる偉大なトップアスリートだった。

高校時代から本格的にハンマー投げに取り組み始める室伏選手にとって、重信はあまりにも身近で、それでいて越えなければならぬ大きな存在だったのである。何かあれば父親と比べられてしまう。

「オ……／オヤジっすか?」「そうっすねーっ／ライバルってとこですかねエ／あんのヤロー／ブッ倒してやりたいっすよーっ」（どれもマンガの中の台詞）と、自分の父

親をついつい「ウザイ」と思ってしまふ室伏選手がいた。

だが、ハンマー投げに「本気」で取り組めば取り組むほど、ハンマー投擲者としての父親のすごさに気付いていく室伏選手。一番近くにいた父親と「本気」でぶつかることでしか、ハンマー投げの面白さに気付くことはできなかったのも事実なのだ。

しかし、そうやってぶつかっていくことが一九九八年には、父親の重信の日本記録を更新することにつながり、二〇〇〇年五月一日、大阪長居競技場での日本人初の八〇mの大台突入、八〇m二三という当時の日本新記録樹立という結果となる。

マンガが出た直後のシドニー五輪で、室伏選手は入賞にも届かない九位という不本意な成績で初五輪を終えることになったが、アテネ五輪では見事、金メダルを獲得、その最後の一投は今でも私の脳裏に鮮明に残っている。

これは父親である重信と「本気」でぶつかり合ったからの結果であり、「本気」でぶつかり合ったからこそ、室伏選手はシドニーからアテネへと前進していったのである。

そして、サイコーとシュージンもマンガ家とマンガ原作者として、常に「本気」でぶつかっているのだ。

二人の「本気」がぶつかり合ったのは、高一の夏休みだった。

ネームがうまく浮かばないシュージンは、見吉香耶とデートし、それをサイコーに目撃されてしまう。一方、サイコーはシュージンのOKをもらって、エイジのアシスタントに入る。

夏休み明けには、シュージンがネームを描けなかったことでコンビを解消するが、離れてみることでお互いのすごさを知ることができ、奇しくも、探偵物という王道で結び付くこととなった二人はコンビを再結成することになる。

それは『PCP』で少年ジャンプの人気漫画家になってからも変わることはない。作品の色調から、『PCP』がアニメ化されないと知ったサイコーは、作画のスピードを上げて、もう一本、アニメ化できる作品を作り出そうとしている。これに対し、シュージンは、アシスタントの白鳥シュンのマンガの原作を手伝うことで、原作者としての幅を広げようとしている。

もう高一のときのような、好きか嫌いかだけの子どもじみたぶつかり合いはないが、それとは違った「本気」のぶつかり合いを、『PCP』を連載しながらサイコーとシュージンがしているのだ。「本気」でぶつからないと、成長することはない。

この後、「本気」のぶつかり合いを経て二人の作品がどのようなようになっていくのか、
今からイチ読者としても楽しみなところだ。

バクマン。勝利学
門脇正法 著

発行・集英社インターナショナル 発売・集英社
定価 1,260 円（税込）
ISBN 978-4-7976-7211-4

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ!](#)